

ぼくの字で書いて

大松 達知

ねむるあなたの苗字をぼくの字で書いて再配達の手留
をもらう
山階基『風にあたる』

という歌に立ち止まった。

まずは、宅配便などの「再配達」が社会問題になっている件。国土交通省の二〇一八年十月期のデータによると、宅配便の再配達率は約十五パーセント。都市部はやや高く、地方はやや低い。生活スタイルの変化が直に影響してきた、とても現代的な問題である。この歌の場合、配達よりも再配達であることで、確実に受け取るための必然性が増しているのがいい。

もちろん、単に新しい事象を詠み込めば秀歌になるわけではない。その点、この歌の場合、再配達は事象としては主役だが、歌の中心はやや複雑な人間関係にある。それも現代的な問題である。

「あなた」という言葉の使い方が最もひっかかるところ。どういうシーンなのか。作者は一九九一年生まれ、男性、

関東地方の都市部に在住。

①（男性の）友人宅を訪問中、その友人が寝ているときに代わりにサインして受け取る。（書留は重要だから、友人を起すのが普通かなあ。）

②女性と結婚しているけれど、（旧姓をペンネームにしている歌人のように）妻の通称が違っているから、妻の旧姓を書いた。（歌集のなかに、結婚してしているという情報はないし、それでは歌として深みがない。）

③そもそも「あなた」ってだれなのか。男性の友人を「あなた」と呼ぶだろうか。呼ぶかもしれない。女性なら「きみ」ではないのか。その微妙な距離感のものは何なのだろうか。

などなど、いくつか想像はできる。ただ、歌集前半にはシェアハウスをしている歌がある。また、後半には女性とルームシェアをしながらも男性の恋人とは居を違えているという歌がある。とすると、寝入ってしまった同居人（男女差は重要でない）とは約束があつて、書留などを代理で受け取るようになっていたのかもしれない。

今後ますます、新しい生活形態が受容されてゆき、短歌に入り込むだろう。そのとき、われわれは柔軟に読み解けるだろうか。情報量の少ない「一首」という形態は、従来の恋愛、家庭生活、職業などを超えた読み方が求められるのだと思う。